

批評・紹介

神田喜一郎著

中國書道史

大野修作

本書の題名である「中國書道史」は一見すると何の變哲もない、書による中國通史であり、どこにでもある書であるかのように錯覚する人は意外に多いかもしれない。しかし、中國と日本とを問わず、本書のような「書」による中國通史は神田喜一郎氏の本書を以て嚆矢と見なしうる。しかも論理一貫し、多くの圖版を驅使している點で、數多い中國の書畫錄(例えば余紹宋『書畫書錄解題』には四百種あまりをあげる)、それらと比較しても、本書は拔群の確固たる存在であり、その後に出たいくつかの書は類似してはいても、本質的に本書を越えていないと思われる。

では本書は一體どのような構成原理、言いかえれば、どのような視點で書かれているのであろうか。この點を中心に、またそもそも書による通史は可能であるのかといった疑問をも考慮に入れつつ、本論を進めてゆきたい。まず本書全體の目次を示すと次のようである。

第一章 殷、周、秦

一 序説 二 殷王朝の甲骨文 三 殷王朝の金文 四 西周時代の金文(一) 五 西周時代の金文(二) 六 春秋、戰國時代の金文 七 戰國時代の石刻、竹簡、帛書 八 秦の始皇帝の字體統一 九 結語

第二章 前漢

一 序説 二 前漢の書道資料(一) 三 前漢の書道資料(二) 四 書藝術の曙光 五 結語

第三章 後漢

一 序説 二 後漢初、中期の石刻文字 三 石碑の流行 四 紙の發明 五 書家の出現とその派別 六 結語

第四章 三國、西晉、十六國

一 序説 二 三國、西晉の石刻 三 樓蘭文書 四 三國、西晉の書家と鍾繇 五 五胡十六國時代の書 六 結語

第五章 東晉

一 序説 二 書體の完成 三 王羲之 四 王獻之 五 その他の諸名士の書 六 東晉の石刻 七 結語

第六章 南北朝(一)

一 序説 二 二王の典型 三 書論の發達 四 結語

第七章 南北朝(二)

一 序説 二 豊富な資料(一) 三 豊富な資料(二) 四 北朝書の變遷 五 結語

第八章 隋、唐(一)

一 序説 二 隋代の書法 三 歐陽詢と虞世南 四 唐の太宗と王書 五 結語

第九章 唐(一)

- 一 序説 二 褚遂良 三 歐陽通と薛稷 四 初唐諸帝の書
五 開元時代 六 結語

第十章 唐(二)、五代

- 一 序説 二 革新書派の發生 三 顔眞卿 四 篆隸書家の出現 五 書法の衰運 六 結語

第十一章 宋(一)

- 一 序説 二 宋初の書法 三 宋の太宗と書法 四 篆書家の輩出 五 蔡襄 六 蘇、黃、米の三大家 七 徽宗と蔡京 八 結語

第十二章 宋(二)

- 一 序説 二 高宗と書道 三 三つの典型 四 張即之 五 金代の書 六 結語

第十三章 元、明(一)

- 一 序説 二 趙孟頫 三 元の復古主義 四 明初の書家
五 文徵明と祝允明 六 浙派 七 結語

第十四章 明(二)、清(一)

- 一 序説 二 董其昌 三 明末清初の文人 四 帖學の盛行
帖學派の諸名家 六 結語

第十五章 清(二)

- 一 序説 二 碑學の勃興 三 碑學派の諸家 四 清末の碑學派 五 結語

本書は今回岩波書店から刊行されたが、全面的に書きおろしたのではなく、こうした單行本となる前、昭和二十九年から昭和三十

三年にかけて、自らが監修者となった平凡社『書道全集』の中國の各卷の巻頭の書道史(以下「總説」と略稱することがある)を基にしており、基本構想としては現在から約三十年前に書かれている。それに手を加えて本書になっているわけであるが、令息神田信夫氏の「あとがき」によれば、本来なら平凡社版「總説」とは全く別個に、新たな構想、新たな敘述形式で稿を書きおろすことを意圖していたが、健康等の理由で振り出しにもつた形で、「總説」を基にしたが、その後の知見や研究の成果をとり入れて、本書の完成を急ぐことになったという(しかし著者は本書の刊行の前年に永眠された)。

故に本書の骨格が形成されてから長い時間的経過があるので、本書と「總説」とを比較してみると、全く同じということではなく、特に第一章から第二章にかけては、まるで別の本といってよいほどの敘述の變化がある。これは恐らく新たに出土した甲骨、金文等の資料が増えたためと考えられるが、「總説」にくらべると、本書の冒頭の數章は中國甲骨學史、金文學史の觀を呈するほどに敘述がくわしくなっている。この部分が全面的に新しく書きおろそうと意圖した所と思われ、そうした背景を知らずに本書を一見すると、『中國書道史』はそれら「甲骨學史」、「金文學史」等の寄せ集めにすぎないのではないかという疑問が少なからず湧いてくる。もしそうだとすれば、本書は書評する必要もないし、またそれぞれの専門分野でそれぞれの研究者がおり、研究業績も數多く存在するので、問題が大きすぎて、とても評者の任に耐えるものではない。もしそうでないとしたら、中國書道史を貫く視點はどこに存するのか、そうした點を中心に問題を究明してゆかなければならない。

まず本書の全體の體裁について述べると、目次からわかるよう

に、各章ごとに（平凡社『書道全集』の各巻に相當する。ただし漢代のみを二章に増している）「序説」と「各論」と「結語」から構成されている。そのうち序説は推察されるように、第一章をのぞいてごく一般的な東洋史の教科書に書いてあるような中國通史の概説であり、ここでは神田氏の本領は發揮されていない。その本領が發揮され、面目躍如たるのは「各論」と「結語」であり、特に「各論」に取りあげられる書人や書道資料において、である。本書が出現するまではこうした取りあげ方はなかつたのであり、注目に値する。

羅列された結果だけからすると平板なものに見られかねないが、その敘述の仕方と相俟って、とりあげられた資料には説得力があり、本書は最後まで十分に読みごたえがある。恐らく著者の長年の學問の研鑽と磨きぬかれた書畫に對する鑑識眼とが長所を生かしあつておればこそ、敘述にゆるみがないのであろう。日比野丈夫氏も神田氏の學問を評して「中國の學問は、史學、思想、文學、美術などに分けたところでお互いに關係が深く、研究はこれらの總合の中で行われなければならない。……中國の學問をするものは、對象が何であらうと中國のものである限り、十分な體驗と學殖をもつて臨めば解決できないものはないという信念の表現といつてもよいであらう。この何ものにも動じない確固たる自信が、神田先生の多くの著作の中に見られる」（『同朋』六四號）と指摘するが、文獻資料ばかりを頼りにする學者にとつて、もっとも苦手な文物・書畫や工藝品についての鑑識の確かなことは、その範圍の廣さとともに他の追隨を許さない。これは天下に名を知られた神田家の蒐藏品に日々接する中で長い間に養成されたものであろう。學校教育しか受けていない學者の最大の弱點を補つてあまりあるといえる。しかし、それだけで

はない、本書には一貫した視點がある。それは何か、これが本書を批評する最も基本的で大事なポイントであるが、結論を先にいえば、「傳統派の王羲之と革新派の顏真卿という二大潮流が中國書道史には存在する」という文化史觀とも呼ぶべき考え方が根幹を成していると思われる。

この「二大潮流」という史觀を問題にするとき、神田氏は「總説」とは別に、「中國書法の二大潮流」なる論文を昭和三十四年にハーバード・蒸京・同志社東方文化講座の一冊として書いていることが參考になる。この論文が本書のたて軸の骨格になつてゐることは兩者を讀みくらべれば明らかである。ちなみにこの論文が通論としての縦軸の骨格をなすとすれば、各論としての横軸に相當する著書としては、著者が戦前、臺灣大學で講義した『畫禪室隨筆講義』（出版は一九八〇年四月同朋舎刊と遅い）があり、それらを織り合わせて本書『中國書道史』が構成されていることが讀みとれる。

ところでこの二大潮流の發想は著者の單なる思いつきではない。その歴史は古く、明確に自覺されるのは、清の阮元の『南北書派論』、『北碑南帖論』に發すると考えられるが、その後新たに出土した石刻資料の増大の情況もあり、楊守敬『激素飛閣平碑記』や康有爲『廣藝舟雙楫』などによつて、南北という二つに明確に區分できない面があると批判修正され、更に寫經の發見等により、中村不折『禹域出土墨法書法源流考』では、南と北とは法帖と碑碣の相違にすぎないと再修正される。そして神田氏になると、南と北とは文化的水準の高い都會と田舎の都鄙の別であると更に修正される。こうした修正情況と自分自身の考え方を神田氏は「二大潮流」の論文の中で次のように述べる。多少長くなるがまとまつた考えが知れるの

で引用すると、「南北書派」ということは、阮元以來、中國書法の二流派として一般に廣く流布している考えでありますが、しかし、阮元がそう見た書風の相違は、實は文化的發展段階の相違に由來するもので、これを相對立する流派として、等價値的に見るべきものではないのであります。では、中國の書道には派というものが全然ないかと申しますと、それは存在するのであります。中國の書道の歴史を大觀しますに、そこにはやはり派といつても差しつかえないような、つまり個人々の細かな個性の相違を超えた書風の別が見つけられないではありません。しかもやはり二つあるのであります、その二大潮流が交互に勢力を替へながら、中國書道の歴史を展開しているのであります。……二大潮流のうちの一つは、いうまでもなく、王羲之に代表せられるものであります、それを典型とする書風であります。……(中略)安祿山の亂……社會の大變動にともなつて、王羲之流の書風は人心に訴ふる力を失ひ、ここに新しい書風が興つてきたのであります。……それは確かに堂々たる風格の書であり、轉換期の緊迫した空氣にいかにもふさわしい、氣魄にみちたものであります。張旭が、王羲之を典型に仰ぐ従來の傳統的な書風に對して、敢然と叛旗を翻した最初の人であるとするとするなら、顏真卿は、まさにそれをうけついで、はじめて見事な成果を擧げた人であるといつてもよいであります。……結局、王羲之にはじまる流派と、顏真卿から發して東坡、山谷において大成した流派、これが、中國書道史における二つの大きな流派であります。中國の書道の歴史は、この二大流派の勢力の隆替であります」(二五―四一頁)。このように自説を組み立てている。この考へこそが本書の骨格であり、また生命になつてゐる。それが本書の隨所にちりばめら

れ、特に第十一章の宋(一)の結語においては明確に述べられていて、全體を統一感のあるものに仕立ることに成功している。恐らく、本書の最も近い源泉としては著者が終生師とあおいだ内藤湖南の持論、とりわけ「概括的唐宋時代觀」(『東洋文化史研究』所收)を中心とする論考が考えられるであらう。内藤氏によれば、儒學では漢學と宋學、繪畫では北宋と南宋、文學では駢文と古文、詩では唐詩と宋詩というように二つの大きな流れがあるとすでに指摘しているが、ただ書道史に對するまともな論述はなされてない。その缺けた點を神田氏は見のがさずに精力的に敘述したのだと考えられる。内藤氏に『支那繪畫史』の著書があればこそ、ますます「中國書道史」を書かなければという責務のようなものが神田氏の胸中に湧き、それが本書を書かせる大きな原動力になつていたのでないかと推察される。そうした二大潮流の發想を書道史にもちこんで通史に仕立てたのは、中國、日本においても神田氏が最初であり、本書において示されたその功績は現在も少しも減じてはいないといえる。

従つて本書は五章の東晉以後から本來の面目を明確にあらわしてゐる。それは王羲之と顏真卿を中心に見た「書風」の變遷史と呼べる時代に入つたからであり、そのためか著者の筆づかひも流暢である。しかし、それ以前の一章の殷、周、秦から四章の三國時代までは、いわば「書體」の確立と呼ぶべき時代である。ただ後漢時代になると、漢字がある一定程度の形成過程を終えて固定した後、自覺的な藝術意識の覺醒がはたらいて、書家として名の知られる人々やそれらに對する批評が出現するが、まだ書風の變遷といつた解釋史が可能な時代には入っていない。これは別の見方をすれば、近年の

新出土資料の増大とともに次第に明らかになってくる過去の事實を中心とした歴史でもある。故にそこでは著者はつとめて實事求是の立場をとっている。平凡社版「總説」をほとんど書きなおして新しい敘述になっているのもそのためであろう。本来、本書は「總説」とは別に全く新しく書き直すはずであったとあながきにあるが、恐らく新資料の扱いをめぐって、そのように構想したのである。しかし、そこにおいても働いているのは、神田氏の藝術的審美眼である。出土品の年代測定もさることながら、それ以上に評價の仕方にも重點が置かれていることでもそれはうかがえる。例えば殷代の甲骨について、董作賓氏の説を引いて、五期に分かれるといい、第一期の書を「雄偉」、第二期の書を「謹飭」、第三期の書を「頽靡」、第四期の書を「勁峭」、第五期の書を「嚴整」と評する董氏の説を紹介し、それを實物に照して確認し、「この時期において、すでに書に對するおのずからなる美意識がある程度進んでいたことである。この意味において、甲骨文はひとり中國最古の文字があるばかりでなく、ここに中國書道史の發端を見ることができ」（本書五頁）と述べている。金文に對しては、殷代では容庚氏の「雄壯派」と「秀麗派」の二派があることを紹介し、實物で驗證し、また西周期のものに對しても、「召鼎、散氏盤などはおおむね典雅整齊で、前期の宗周鐘などの書風を一層推進せしめたものといふことができ」（本書一〇頁）と評している。これらから推察されるように、新たに出土したものを含めて、過去の書道資料としての文物に對してきわめて謙虚であり、今後とも著者が生きていて更なる出土文物があつたとすれば、事實として必らずや取りあげるのである。しかし、審美的な側面を常に忘れてはおらず、そこに書道史の敘述の可

能性を見出していると考えられる。故に本書は五章以下が二大潮流を軸に論を進め、第一章から四章まではその方法論を完全には使えない情況にあるが、全書を通じて一章から最終章まで、神田氏のすぐれた藝術的審美眼によって支えられ、不思議ともいえる統一が保たれているのである。

二

以上全體の構成論を中心に見てきたが、以下各論的に特徴的な面を見てゆくと、第一にあげるべきは、掲げられた資料が、石刻であれば現存または出土した場所、眞蹟や法帖であれば所在の場所が明記されていることである。これは現物ないしは寫眞版を直接見て、自分で納得した資料だけを使っていることを示すであろう。特に日本に傳わる重要な寫經や拓本については、例えば西魏の大統十年の菩薩處胎經は京都知恩院の藏（本書一〇〇頁）といい、また孔子廟堂碑は原石が佚亡して、いまわが三井聽水閣に祕藏する唯一の唐拓本と紹介する（本書一四四頁）など、所藏者まで明らかにしている。こうした態度はいわば書誌學者と古物マニアの兩者を兼ねそなえないと出来ない面があり、しかもその收載された數の多さとバランスの良さはこれまで何人も成し得なかつたものである。これには、著者が大學教授以外に、大正十五年、三十歳の時から宮内省圖書寮囑託として漢籍目錄の編纂に従事されたことに始つて、昭和二十五年より三十四年まで、文化財保護委員會專門委員、奈良縣文化財專門

審議會專門委員、正倉院御物書蹟調査などを擔任すると共に、二十七年、京都博物館が國立に移るとその初代館長として基礎を定めたといった經歷がものをいっているであろう。そうして培われた審美

眼が、著者の内部で肉體化され、自らのものとなって断定的に評價しうるまでになっており、その断定は少しも不自然さをともなっていない。またそれは豫見ともなっている。例えば「歐陽通の書は顔真卿の現れる豫告版になっている。彼の書を見ていると、この時代の書法の變化が、ひしひしと感ぜられてくる」(本書一五九頁)というように、いわば「ものの詩學」とも言える面を本書が持っていることである。そもそも著者は、書畫のみならず、古典籍への愛好は強かった。例えば平岡武夫氏は著者を追悼して、「神田先生を更に特徴づけるものは、古典籍の愛好でございましょう。先生の處女出版は、學位論文ではなく、實に『典籍劄記』であります。時に昭和二十二年、五十一歳。それが四十四年、七十三歳には内容を倍加して『東洋學文獻叢說』として刊行され、さらにこのたびの『全集』編集に際して、『舊鈔本叢說』を新たに加えておられます。…『典籍劄記』の序に、先生は、生まれおちるから、古書堆裡に育ってきたわたくしは、古書いぢりが習ひ性となつて止められない。それからそれへと絶えず氣のむくままに涉獵し探索してゆく。他人は嘲って書類といひ書淫といひ書狂といふ。しかしこの愉しみは、わたくしにとっては格別である」と言うておられます」(『日本學士院紀要』第四十卷二號)と評している。これは『全集』に收める各種の古書展覽會に關する記事から生き生きとした筆致が感ぜられることからも首肯できるが、決して單なる愛書家というのではない。たとえば家藏の善本を詠んだ「鬯齋藏書絕句」を例にとつてもわかるように、書物の内容の學問的價值とテキストの書誌學的價值を的確に把握し、しかもそれを漢詩で表現していることは餘人にはなかなか出来ない技である。

これは著者が言葉を大切にされる人であることを意味する。各論の第二點としては、この言葉を愛する態度があげられよう。この點が本書の魅力の大きな理由であり、書道史という通史を扱っているながら歴史家だけにはとまつていないのである。本書は通史としての立場上、各時代をある程度公平に見なければならぬという制約があつて、言葉を大切にするというこの面がはつきりしないかもしれないが、例えば「宋濂について注意すべきことは、文學上に復古主義を強調したことで、これが明王朝の半ばごろまで大きな支配力をもつたが、そうした文學上の主張が書法の上にも、間接的に少なからぬ影響を與えたと思う」(本書二二一頁)といい、文學を以て書を含めた文化の基準に使っていることからうかがえる。この傾向は本書の横軸ともいふべき「畫禪室隨筆講義」の中では遺憾なく發揮される。例えばその二十二則に出てくる「合處」なる語が、「合作」と同じく、「傑作」を意味することを證明するためにあらゆる文獻資料を駆使して九頁にもわたつて説明する(なお、谷口規矩雄氏に「合作の意味について」——『東洋美術論考』所收——があるが、もともと没交渉で書かれていると思われる)が、これだけに限らず隨所で一つの言葉の正確な意味を把握するために、一篇の論文を書くつもりで一字一字をたんねんに讀みすすむとする姿勢が讀みとれる。また「畫禪室隨筆講義」からいえることは、いちいち例をあげないが、難解な禪語や現在では死語になっている當時の口語に對しても相當な理解を持っていることである。そうした素養がやはり本書にも充分生かされているのであり、それが二大潮流という確固とした全體の構圖に更なる深みを與えていることは見のがせない。各論的な特徴は以上述べた藝術的審美眼と言葉を大切にされると

いう二點が最も代表的であるが、本書はそれだけにとどまらず、中國思想史、繪畫史、文學史をもその射程の中にとりこんでいるのであり、例えば、明の畫壇の吳中派と浙派の構圖が、書壇においても存在したことを、『書畫跋跋』や『寶翰齋帖』を使って、「書については、後世ほとんど浙派という一派を認めていないが、當時の意識においては、やはり浙派というものは存在したことは確かであろう。そうしてその代表者としては豊坊ということになっていたと思う」（本書二三四頁）と證明しており、結果的に本書にヴァラエティと立體感をもたらしている。更にまた政治史（石碑の流行と不振）や書寫材料の變遷（紙の發明等）にも神経がゆきとどいており、本書全體を信頼感の高いものにしてゐる。

總じて本書は、中國文化の總體を、そのエッセンスを過不足なくとらえて肉迫してゐるのであり、中國の正統的な文化に精通した人でなければ、書きにくく、また越えがたい存在と言わねばならない。たしかに新しい資料を加えて本書をより詳細にすることはいくらかでも可能であろう。しかし、それでは本書を越えたことにはならない。

三

最後に氣になる點がないわけではないので、三つだけあげると、第一に、二大潮流という枠組の設定に意を用いる結果、等閑視される書人がおること。例えば鍾繇や懷素らがそうであり、鍾繇であれば、後の庾肩吾「書品」や孫過庭「書譜」などの書論では王羲之と並んで批評基準となる重要な人であるが、わりあい簡単にしか觸れられていない。枠組と同時に現存する作品を重視する立場から書か

れている本書にすれば、「書論」が輕視されるのもやむをえない面があるが、しかしそれを補うべき書はすでに神田氏の後輩にあたる中田勇次郎氏の『中國書論集』（二玄社刊）が刊行されているので、本書の讀者はあわせ讀むべきであらう。次には明清時代から現在に至るまでの比重が他の時代に比べてやや軽いということがある。資料が豊富で身近でもあり、現在、實物の作品に接しうる點で、もう少し詳しい論述と位置づけがあると、本書はよりヴィヴィッドなものになるであらうが、この點こそは今後の人間に課せられた課題であらう。もう一つは圖版についてである。平凡社『書道全集』が圖版を主とすれば、本書は論述が主となっているが、本書の圖版の選擇は「あとがき」によれば、著者の生前は冒頭の數章までで、残りのほとんどが未整理のままであつたという。それを杉村邦彦氏の盡力で選定された由であるが、實によく選ばれていると思う。圖版を見るだけで、確實に時代の變遷をたどれるまでに、一點の無駄もなく擇びぬかれた資料を載せてある。欲をいえば、そのほとんどが平凡社版にすでに見えていて新資料にとほしいことであるが、本書の論述に従うかぎり、やむを得まい。そうした欲求は、『書道全集』の補遺というべき『中國書道全集』が、中田勇次郎氏の編で平凡社よりまもなく刊行されるので、必らずや解消されるであらう。

いづれにしても、本書『中國書道史』は神田氏の廣い學問の總決算ともいふべき性格の書で、『神田喜一郎全集』に匹敵する内容を持つのであり、後學の我々には、越えるに困難な一大高峰であることは間違いない。

一九八五年六月 東京 岩波書店
B5版 三〇四頁 五八〇〇圓